



高松塚古墳の調査

(飛鳥藤原第147次調査)

高松塚古墳壁画の解体修理に伴う調査。墳頂下4.9mで石室が露出。墳丘は厚さ3cm前後の版築を積み重ねて築かれている。石室は特に堅固な白色版築層で覆われるが、巨大地震による損傷を受け、木根が石室石材の継ぎ目に入り込む。北西から。

本文102頁参照 (撮影：井上直夫)

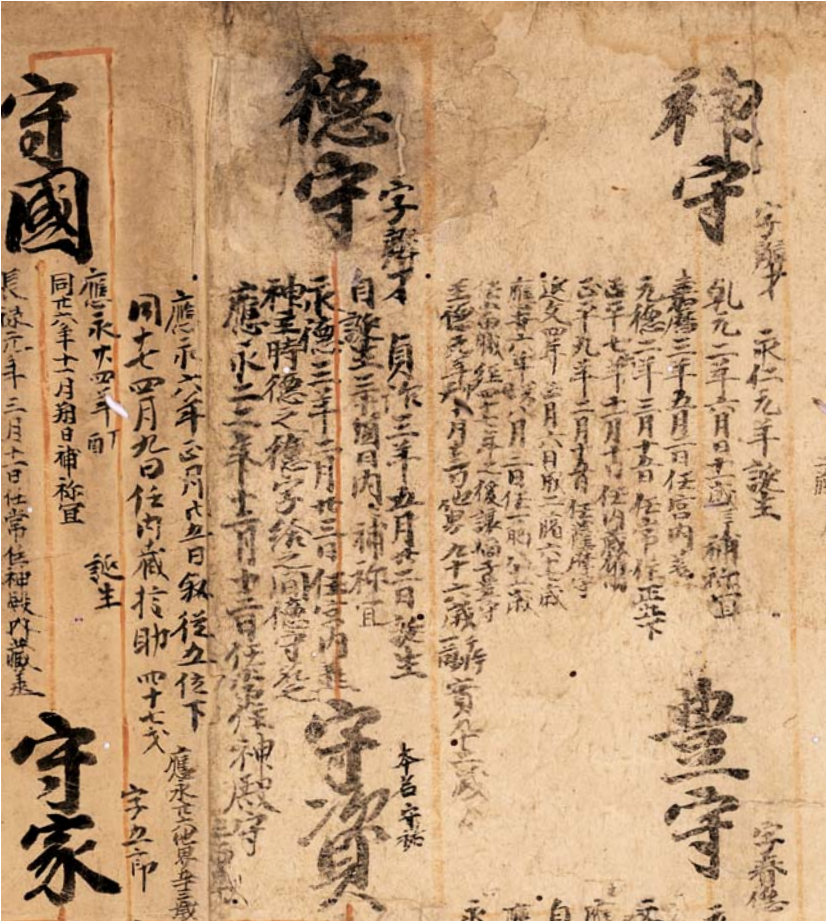


飛鳥寺の調査

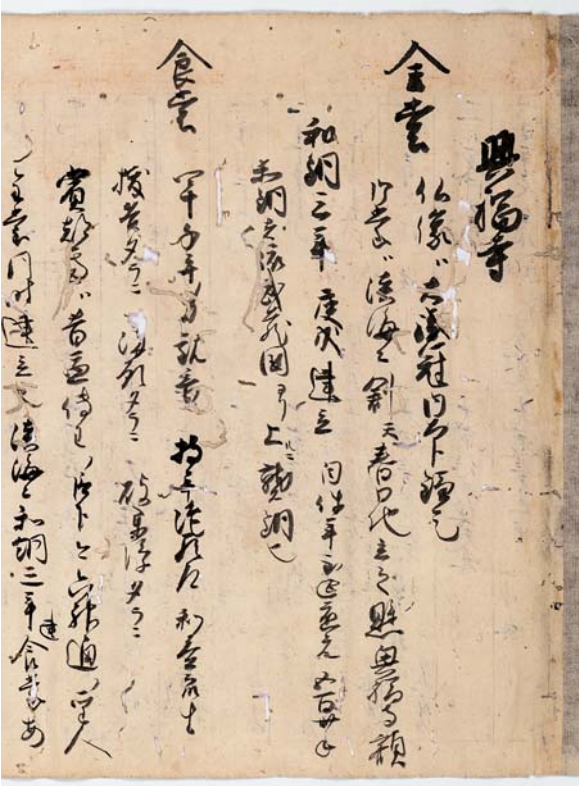
(飛鳥藤原第143-6次調査)

講堂の西南隅から南辺部を調査した。1956年の調査で検出していた1個を含め、計4個の礎石が見える。礎石は花崗岩製の巨大なもので、遺構の残存状況が良好であることがあらためて明らかとなった。西から。

本文105頁参照 (撮影：井上直夫)



北郷常住神殿守系図（大宮家文書）
卷首から南北朝期までは、後世の追記を除き一筆で書かれている。「神守」は、応安6年(1373)までは一筆、至徳元年(1384)の逝去記事は書き継ぎ。孫の「徳守」は永徳3年(1383)までが一筆、応永年間(1394～)からは時々書き継ぎ。朱線も徳守に至る朱線までが一筆。南北朝成立の古系図といえる。写真左上
本文26頁参照（撮影：中村一郎）



興福寺元興寺東大寺八幡宮等記
（大宮家文書）
鎌倉中期の撰著を、鎌倉後期に書写した古写本。楮紙打紙に流麗な行書で記す。記述は簡潔だが、独自の内容も含む。紙背には正和4年(1315)の具注暦が存在する。縦28.9cm、全長166.1cm、4紙。写真左下
本文26頁参照（撮影：中村一郎）

石神遺跡出土の鋸
第18次石神遺跡の調査で、南北溝から出土した鋸である。鋸は先端を欠くものの、都城周辺ではじめて完全な姿を確認することができた。古代の鋸の具体像示す資料として、また大工道具史や建築技術を考える上でもきわめて重要な資料となろう。
本文20頁参照（撮影：井上直夫）





藤原宮朝堂院東第四堂・東面回廊の調査

(飛鳥藤原第142・144次調査)

東第四堂は当初、桁行16間(210尺)・梁行5間(48尺)で計画され、途中で梁行の規模を4間に縮小したことが明らかになった。東第三堂と全く同様の変更である。北西から。

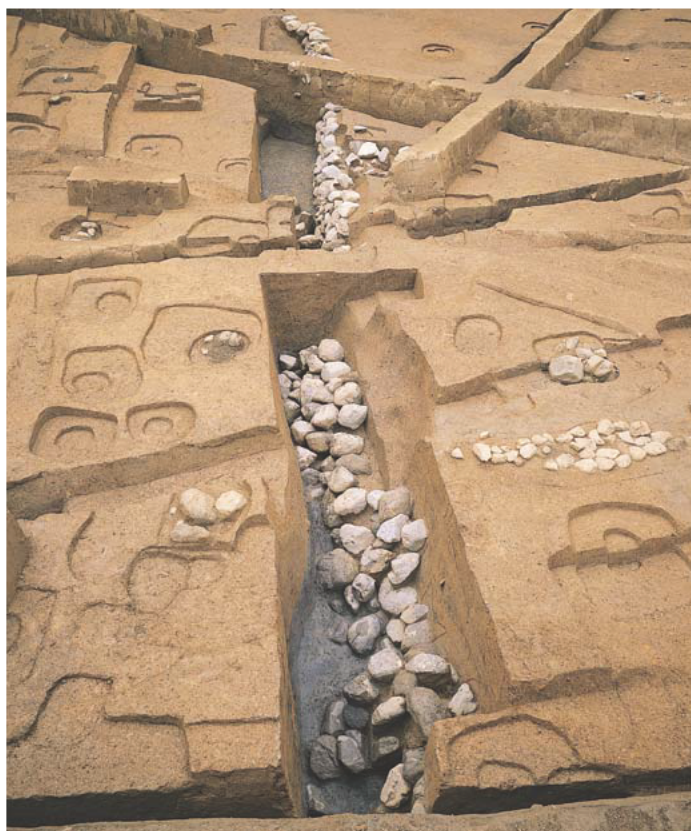
本文72頁参照 (撮影：井上直夫)



基壇外側に廃棄された瓦

東第四堂の基壇(梁行4間時)東側で、建物解体時に廃棄したとみられる瓦の堆積を検出した。瓦は小片が目立つ。東から。

本文72頁参照 (撮影：井上直夫)



甘樫丘東麓遺跡の調査（飛鳥藤原第146次調査）
甘樫丘東麓の谷地で7世紀の大規模な整地を確認した。整地は大きく3時期に分かれ、建物や塀を建て替えながらの活発な土地利用が明らかになった。南西から。 本文86頁参照（撮影：中村一郎）

石垣SX100

7世紀前半の最も古い整地にともなう石垣。谷の東半部に土を盛って一段高く整地し、法面に石を積み上げる。南東から。

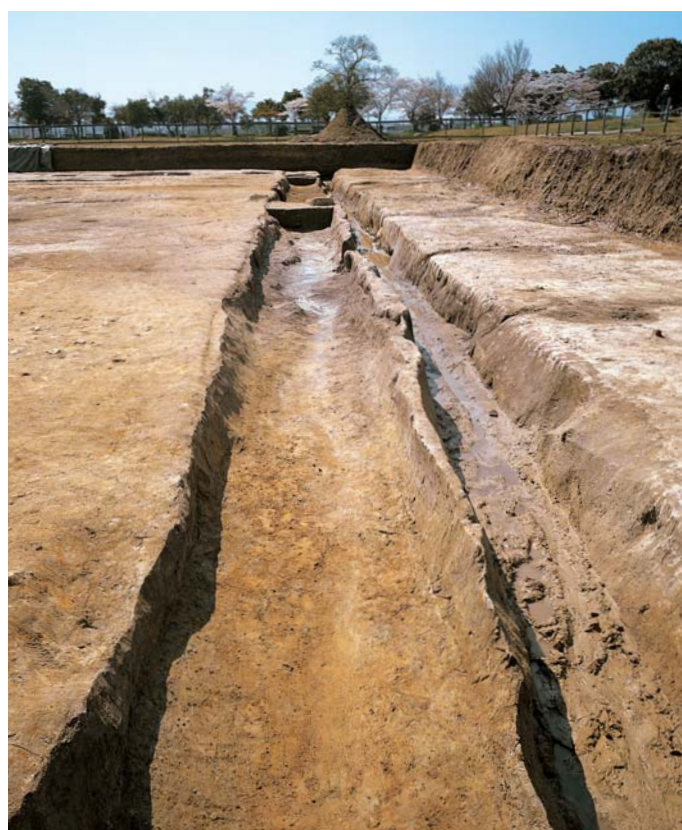
本文86頁参照（撮影：井上直夫）



平城宮朝集殿院の調査（平城第399次調査）

朝集殿院の北辺部～東朝集殿西方にかけての調査。手前が西調査区で、朝集殿院の南北道路と、その路面上に並ぶ旗竿穴を検出した。奥の第394次調査区には東朝集殿SB6000の基壇が見える。北西から。

本文116頁参照（撮影：中村一郎）



東西溝SD18947

西調査区の北縁にて検出した東西溝。朝集殿院の北辺部を流れる奈良時代前半の東西溝である。下層は砂で埋まり、上層は人為的に埋め立てられていた。第265次の排水溝が溝のすぐ右手にある。東から。

本文116頁参照（撮影：牛嶋 茂）



西大寺食堂院・右京北辺の調査

(平城第404・410・415次)

西大寺食堂院の中心堂舎を検出し、その位置と伽藍配置の大半が判明した。巨大な井戸や埋甕列なども検出し、史料にはみえない遺構も確認した。北西から。 本文134頁参照 (撮影：牛嶋 茂)

食堂院大炊殿と一条北大路

SB960は「西大寺資財流記帳」の記述と規模が等しく、礎石据付穴は根石や瓦を積めた壺掘地業を施す。また、調査区の中央では、一条北大路の南側溝を検出した。南から。

本文134頁参照 (撮影：牛嶋 茂)



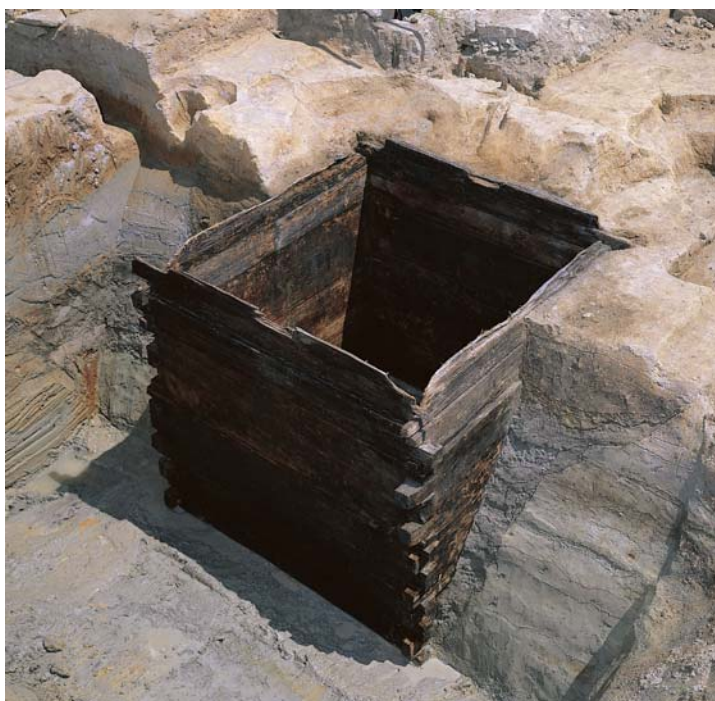
西大寺食堂院木簡

SE950埋土から、約360点の木簡が出土した。「延暦十一年」の年紀のほか、西大寺の寺院経営を示す資料として注目される。

本文138頁参照（撮影：中村一郎）

井戸SE950

内法一辺約2.3mの井籠組井戸。木簡のほか、食事に関わる土器や木製品・食品残滓・墨書土器・製塩土器など、多種多様な遺物が出土した。南西から。 本文138頁参照（撮影：牛嶋 茂）





平城宮東院地区の調査（平城第401次）

東院地区の調査。この調査では複数の掘立柱塼を確認したことによって、時期ごとに区画の位置が変化することがわかった。さらに、奈良時代後半では、掘立柱塼を挟んで西側と東側とでは建物群の様相が大きく異なることがわかった。東から。

本文122頁参照（撮影：牛嶋 茂）



重複する石組溝

今回の調査では、多くの石組溝を検出した。西区では完全に重複する石組溝を確認し、それによると、古い石組溝の上に土を盛り、新しい石組溝を造ることがわかった。念入りの改変の様子がうかがえる。北から。

本文122頁参照（撮影：牛嶋 茂）